



TITLE:

東亞天文協會觀測部月報

AUTHOR(S):

---

CITATION:

東亞天文協會觀測部月報. 天界 1943, 23(268): 331-339

ISSUE DATE:

1943-10-25

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/168662>

RIGHT:

# 觀測部月報

Monthly Report, Observing Section, O. A. A.

★

東亞天文協會

## ★遊星面課 PLANETS.

課長 伊達英太郎 (E. Date, President)

久し振りに御目見得する。餘りにも振はなかつた本年度だつた。1941年度の火星を送つての一休みにしては、餘りにも永すぎた。尤も、斯く記す筆者が課長の重責を少しも果してゐない事を、先づ御詫びしなければならないが……。

宮崎市の薦田一吉氏から木星と土星の見取り圖を少數、銚子市の瀧田正俊氏から金星の寫眞(15糎反射鏡に依るもの)を受領したのみである事は、如何にも振はなさすぎる。火星の觀測は面白いに違ひないが、然し、木星にせよ、金星にせよ、連續して觀測すれば、無趣味な星では決して無い。木星表面等、火星の固定的模様と比較すれば、寧ろ變化萬態、其の興趣は火星に比し勝るとも劣らぬ面白さがある筈である。要は長期觀測であり、連續觀測である。太陽黒點の相對數法の強味は、小口径機にても、長期に渉るもの程價值が多いが、遊星面とて同理である。大口径での1~2枚の見事なスケッチは、成る程美しく、素晴らしいには違ひないが、それだけでは價值は零に等しい。10糎や15糎級の比較的小さい器械にても、出来るだけ多くの見取り圖、しかも、それを永年續ける事に依つて初めて價值づけられるのである。敵國の例を舉げる事は心苦しいが、かの英の故スタンリ・キリアムズの長年月に渉る木星の長期記録は、素人としての最高水準を示すものとして、推賞されてゐるが、僅に16糎の反射鏡に依つて遂行されたものである。時は總ゆる物資の不足を告げる戦時である。苦心して入手された望遠鏡は、必ず活用して頂き度い。本邦の素人の有つ15糎級の反射鏡は相當の數に上る筈であるが、その何%が活用されてゐるか? 全く慨歎にたへない。何か一つ目標を決めれば、15糎でも、10糎でも、否5糎ですらも必ず仕事は行はれる筈。諸賢の奮起を祈つてやまない。火星が2年2ヶ月を経て、近付いて來た。詳しい物理表は前號の會長の記事を熟讀されたい。同記事に依つて判る如く、今年末の火星對衝の高度は、ヒヤデス星群の稍北寄りで、黃道が殆んど最も北に寄つた位置に近いため、北半球の觀測者に取つては、視相の點から言つて好都合と云へる。又、火星表面は、久し振りに(6年振り)北半球を地球へ向ける事になり、例の網狀運河の交叉する沙漠地帯が夜分に見られる譯で、火星觀測者も、今回の對衝は、心機一轉して、新しい氣持で火星

を見直すべきである。只、視直径が最大17.6に過ぎないから、前々回や前回の對衝に比較すると、小口径での觀測が、相當困難になるウラミがある。が、しかし、15糎級を以てすれば決して不足ではないのだから、大いに頑張つて頂き度い。最も大切な事は“良心に恥ぢない正々堂々たる記録”たるべき事を、堅く御願ひしておきたい。協同觀測要旨を下記しておきます。

(1) 期間は昭和18年10月1日より同19年1月末日迄。但し、期間外の記録も大いに歓迎する。(2月初めに纏めて送付の事)

(2) 用紙は本會制定の物、又はハガキ型の書用紙に、徑6糎の圓を書き、これにスケッチするも可。但し、觀測月日、時刻、視相、天候及觀測器械種類口徑、倍率等を併記の事。

(3) スケッチは黒一色とす。色彩スケッチは原則として受理せず。(但し色彩スケッチに練達せる特殊觀測者は例外とす)。

(4) 視相尺度は原則として、ピケリングの標準尺度を使用の事。但し、便宜上、各自撰定の尺度を使用するを妨げざるも、其場合は、必ず、尺度の詳細を報告の事。

(5) 時刻(經度決定時刻)は分位まで正しい時刻を記録するを要す。これがため毎日19時及21時(曉天觀測の場合は5時)のラヂオ報時に時計面を比較しておく事が望ましい。(以上)

### ★彗星課 COMETS.

本會急報第599號及び國際同盟回報第943號(四月1日附)によれば、去る三月29日白國ユクル天文臺のアレンド Arend 氏は下の如き一新彗星を發見した：

1943年(世界時)	赤經(1943.0)	赤緯	毎日の運行	光度
三月29日0時 <sup>分</sup> 7.7	12 <sup>h</sup> 39 <sup>m</sup> 53.4 <sup>s</sup>	+47°48'15"	-2 <sup>m</sup> 34 <sup>s</sup> -40'	13 <sup>m</sup>

この星の發見事情については同盟回報944號(四月6日附)に詳報があつた(本誌前々號第277頁參照)のみで、その後、リゴ1、デルボ1兩氏が寫眞觀測に成功しなかつた由を傳へたが、果然、近着の同盟回報950號(五月27日附)には、'スキス國チウリヒ天文臺のブルナ、ハガ兩氏が此の星は新彗星でなく、全くホイブル・フェトケ星の一片であるといふ意見を發表した。(本會急報第617號參照)ホイブル星は、三月29日0時(世界時)には

赤經 12<sup>h</sup>41<sup>m</sup>16.813<sup>s</sup> 赤緯 +48°3'36."2 (分點193.0)

太陽から 1.543 地球から 0.706 單位

にあつたのであつて、アレンド氏も、“此の星は三月28日5時にはホイブル・フェトケ星と殆んど同じ位置に在つた筈だ”と報告してゐるが、ブルナ氏は、これ

畢竟このアレンド星が太陽の輻射壓により、28日5にホイブル星から分離した一部である證據だとし、尙、チウリヒで三月29日877に撮影した寫眞によれば、ホイブル星の頭部から $1^{\circ}5$ ばかり離れた所に、直徑 $0^{\circ}3$ の星霧狀の尾らしい一部があつて、之れは同星の尾から $0^{\circ}1$ だけ離れてゐる。又、三月31日001に同所で撮つた寫眞によれば、この同じ一部分がホイブル星の頭部から $2^{\circ}7$ も離れて居り、從つて此の兩天體の相對的運動は毎日 $1^{\circ}1$ づつとなり、逆算すると、三月28日5には、之れが重複してゐた筈であること明らかである。

三月27日8には地球上に於いても極光が現はれたが、之れは勿論太陽から發した電子流のために起つたものであると同時に、アレンド星も亦これによつてホイブル星から放出されたであらう。上記の極光はユゴスラヴ國のザグレブ(アダラム)市のSt. Mohorovicic氏から公表されたものであるが、かうして太陽からの電子流が地球に到着した時刻と彗星の頭部に到着した時刻との差から計算して見ると、電子流が一天文單位だけの距離を飛行するのに約30時間を費すこととなり、從つて、太陽面に大爆發が起つて、電子流が八方に飛び出したのは、三月26日5(世界時)となる。ちやうど此の前日、即ち三月25日に、大きい黒點群が太陽の中央子午線を通過したのは、注意すべきことである——といふ。この事件によつて、彗星の研究にも太陽黒點との關聯が重要であることが知れたのは、學術上に大切なことである。(Y.)

**★太陽課 SUN.** 八月と九月の黒點觀測の假報告を茲に掲げる。先月來非常に勉勵しておられた保積氏が八月中には遂に31ケ日無欠測の成績を得られたのは喜ばしい。坂上、藤吉兩氏が各2ケ所で觀測された。そのうち藤吉氏は器械も2種類用ゐられたので、取り扱ひを全く別にし、久留米の平均だけを採つた。大阪明星商業は14ケ日の觀測を送つて來てゐるが、觀測が6人に分擔されてゐて、個人差の計算が不可能なので、こゝに載せないことにした。今までに幾度も注意した通り、黒點觀測は、同じ人が、同じ器械と、同じ方法で永く續けて貰はないと、個人差が種々になつて、整理が面倒になり、從つて、價值が少ない。學校所屬の觀測班などでは、教師たる者が、よく此の事を生徒に教へて貰はないと、學術指導といふことが、無意義になる。秋澤氏が八月に倍率を變更した。これは、同氏が器械を檢査した結果、今までの倍率が間違つてゐたのであることが知れたのだ。他の人にも同様な誤りがあるだらう。因みに、チウリヒ天文臺の觀測者が過去84ケ年にわたり、口径76糎、倍率64倍の屈折機で直接眼視觀測を今も續けて居ることを記憶されたい。この八九十年の間に、天文器械の進歩發達は甚だしいものであることは言ふまでもない。しかし、個人差(k係數)の變はることを恐れて、器械や方法は變へないのである。これでこそ前後幾十年にわたる黒點觀測を、一貫したものとして、整理することが出

## 太陽黑點觀測の假報告 (昭和18年八月) Sun-spot Relative Nos., August. 1943.

觀測者	西山 峰雄	坂上 務	藤吉 泰男	秋澤昭二 郎	恒岡 美和	疋田 源一	西尾 敏夫	植田 耕作	青木 章	木邊 成麿	竹内 潤	伊藤 高明	沓掛 七二	保積善太郎	赤坂 陽			
Obs.	MN	Su	YH	SA	YT	GH	No	KU	Ai	Kb	Tu	TI	Kk	Hs	AA			
(觀測地)	(福岡市)	(鹿児島)	(福岡市)	(久留米)	(福岡市)	(高知市)	(姫路市)	(大阪市)	(大阪市)	(大阪市)	(中里村)	(名古屋)	(名古屋)	(青木村)	(東京都)	(東京都)		
口径 mm	32	42	42	30	50	32	36	38	105	32	70	75	32	32	102	75	55	
倍率 ×	45	64	64	70	44	44	60	65	75	60	64	60	50	50	75	60	50	
方法	D	P	P	D	D	P	D	D	P	D	P	D	D	D	D	D	P	
1	11	C		M		24	M	11	12	0	0	11		11	C	11	M	
2	11	M		0		26	M	M	12	0	0	M		0	M	0	M	
3	0	M		M		36	M	0	C	0	0	0		0	26	11	M	
4	11	C		M		C	C	R	C	R	R	11		R	C	11	M	
5	11	C		M		22	11	C	M	M	M	M		C	C	R	11	M
6	24	M		25		C	11	M	M	M	C	M		11	M	24	11	
7	24	22		11		23	11	M	M	M	11	11		11	C	22	11	
8	22	23		11		27	11	23	M	11	11	22		11	22	23	11	
9	M	23		33		38	11	22	M	11	11	22		22	C	33	22	
10	22	C		22		24	22	22	M	13	23	22		22	C	22	22	
11	M	C		C		37	22	22	22	11	25	M		22	M	22	22	
12	22	C		22		24	22	22	M	11	M	22		22	22	22	22	
13	22	C		C		24	22	23	22	25	22	22		22	22	23	22	
14	34	C		22		24	23	34	34	13	23	34		11	C	34	22	
15	34	C		24		23	11	22	22	13	23	22		22	C	22	22	
16	25	R		11		23	R	C	22	13	M	23		C	C	23	22	
17	23	C		23		61	22	22	22	25	M	23		22	C	25	22	
18	36	37		22		44	22	33	46	23	M	39		22	M	35	34	
19	34	R		22		27	24	M	44	M	25	37		27	22	M	35	34
20	C			C		R	11	35	M	12	25	37		15	23	M	40	37
21	C			C		23	0	38	26	0	27	29		14	25	M	27	26
22	25			C		37	0	37	38	0	15	31		0	23	27	25	24
23	11			26		M	22	0	M	24	0	M		0	0	11	25	0
24	0			C		M	12	0	M	M	0	0		0	0	C	0	0
25	0			11		M	C	0	0	M	0	0		0	0	C	0	0
26	0			C		M	29	0	C	M	0	0		C	0	M	0	0
27	0			0		0	23	0	13	M	0	C		0	0	C	0	M
28	14			14		M	R	0	13	M	0	M		0	15	C	15	15
29	13			C		M	22	0	13	13	0	13		0	13	M	14	14
30	C			R		R	25	0	C	M	0	0		0	11	11	0	0
31	M			0		0	24	0	0	0	0	M		0	C	0	0	0
平均 Mean	17	17		19		28	10	20	24	7	12	19		13		18	17	
日數 Days	25	9		13		2	26	26	20	15	25	21	23	11	27	7	31	25

太陽黑點觀測の假報告 (昭和18年九月) Sun-spot Relative Nos., September, 1943.

觀測者	秋澤昭二郎	西山峰雄	松久博	西尾利夫	正田源一	恒岡美知	木邊成麿	伊藤高明	竹内潤	沓掛七二	保續善太郎	赤坂陽	坂本務	植田耕作	前田大作	青木章		
Obs.	SA	MN	HM	No	GH	YT	Kb	TI	Tu	Kk	Hz	AA	Su	KU	DM	Ai		
(觀測地)	(高知市)	(福岡市)	(松江市)	(大阪市)	(大阪市)	(姫路市)	(中里村)	(名古屋)	(名古屋)	(青木村)	(東京都)	(東京都)	(福岡市)	(鹿児島)	(東京都)	(大阪市)		
口徑mm	32	32	60	105	38	36	75	32	32	102	75	55	42	42	32	45	70	
倍率×	44	45	32	75	65	60	60	50	50	75	60	50	64	64	60	40	64	
方法	P	D	D	P	D	D	D	D	D	D	D	P	P	P	D	D	P	
1	23	M		0	0	0	M	0	M	0	0	M	0		0	M	0	
2	11	M		0	0	0	M	0	0	0	0	M	0		0	M	C	
3	11	D		M	M	0	0	0	0	0	0	0	0		0	M	0	
4	22	(0)		0	0	0	M	C	R	C	0	0	C		0	0	0	
5	0	(0)		0	0	0	M	C	C	C	0	0	C		0	0	0	
6	0	M		0	0	0	C	0	0	0	0	M	C		0	C	C	
7	0	17	R	19	M	0	19	19	0	26	19	16	15		M	17	16	
8	16	M	R	19	M	16	21	C	37	C	27	17	R		32	17	M	
9	16	R	R	19	21	23	29	31	25	24	33	22	R		32	17	22	
10	24	R	19	M	M	16	21	21	26	C	19	C	C		32	C	18	
11	14	R	R	15	M	R	M	16	25	C	30	16	C		32	M	C	
12	C	25	R	M	26	13	R	15	19	28	29	13	14		R	13	C	
13	23	M	0	0	0	0	M	0	0	C	11	0	0		0	M	C	
14	11	(11)	0	C	C	M	0	C	R	C	0	C	C		0	M	C	
15	11	R	R	0	0	0	0	0	0	0	0	0	C		0	M	M	
16	M	M	0	0	0	0	C	C	M	C	0	M	M		0	C	0	
17	M	0	0	0	M	0	M	0	0	C	0	C	0		0	C	0	
18	C	15	12	C	17	12	M	C	R	C	14	17	C		0	17	15	
19	R	R	R	R	C	C	R	C	23	C	17	17	R		C	14	C	
20	R	R	11	R	C	R	R	C	R	C	16	14	R		0	14	R	
21	11	14	R	14	13	0	19	0	R	R	19	M	13		0	C	C	
22	0	14	0	15	M	0	12	0	0	C	17	0	0		0	0	C	
23	12	0	0	0	C	0	0	0	M	0	0	0		M	0	0	0	
24	11	0	0	0	M	0	0	0	0	0	0	0		0	0	0	0	
25	0	0	R	C	C	0	C	0	R	C	0	0		0	M	0	C	
26	C	0	C	M	0	C	M	0	M	C	0	0		11	M	0	0	
27	11	11	12	M	M	11	R	C	C	C	0	C		12	C	R	C	
28	12	13	C	M	C	C	R	22	C	25	C	13	12		22	R	11	C
29	17	12	12	12	M	11	12	22	M	12	C	C		23	M	C	12	
30	14	(12)	12	12	M	12	12	22	M	C	12	M		22	23	22	12	
平均Mean	12	9	6	7	6	5	10	7	12	8	10	8	8	7	9	6		
日數Days	23	12	13	19	12	24	14	21	16	11	29	19	16	22	16	15		

來、從つて、太陽自體の變化を検出することが出来るのである。(觀測者が死したり、退職したりして、交代するのだけは、不可抗力で、致し方が無い) 器械や方法や人が頻繁に變るのでは、相對數の變動の中から太陽黑點のみによる變化を見つけるのに面倒が多い。

太陽黑點が地球の諸現象に與へる影響は愈々疑ひ無い。又、今日の如き戰時に、黑點の變動を監視することは、勝利のためにも必要である。從つて、本課では、今後、課員中の特に優秀な觀測者から黑點の經緯度の觀測を毎日受理して、刻々の變動を研究し、適當な方法で〇〇に報告したいと思つてゐる。それで、課員諸氏のうち、赤道儀を用ゐて、黑點の經緯度の測定をやる人、又は經緯度圖上に毎日の黑點の見取り圖を書き得る人は進んで田上天文臺に申し出て貰ひたい。其の人々には、無代で、經緯度線圖を幾枚でも進呈する。尙、詳しいことは、個人的に説明する。この案は、本田實氏が瀬戸の觀測所に勤めてゐられる間は、實行してゐたのであつたが、同氏の應召後は途絶えてゐるのである。(山本)

伊達英太郎氏が、先年のスコフィールド氏や中村要氏と同様、この八月からヒルガ製の分光器で紅焰を毎日觀測してゐられる。別頁(次號に掲載の豫定。何れ此の課報にも出ることがあらうと思ふ。)

黑點の新列が現はれたことは木邊正田兩氏の報告として天界 265 號や急報 609 號にも載せたが、近着の I. A. U. 回報によれば、ドイツではポツダムのクリュベル博士が 1 日早く、五月 16 日に同じ新黑點を確認した由。

★**黃道光課** ZODIACAL LIGHTS. 大阪の西尾利夫氏が富士登山中に、八月 9 日の曉天に見たといふ黃道光課の報告が送られて來た。二般に夏は黃道光を見る人が少ない。しかし秋から冬にかけては觀測もやり易くなるから、大に奮發して貰ひたい。尤も今秋は金星が曉天に於いて黃道光を多少妨げるだろうが。

★**流星課** METEORS (141) 課長 小横孝二郎(Koziro Komaki, President)  
十一月の流星群中活動の豫想されるものは：(November meteors:)

活動期間	極大日	幅射點	附近の星	備考
十月下旬～十一月上旬	17日±	$\alpha=43^\circ \quad \delta=+22^\circ$	羊 41	緩、輝、(エンケ)
十一月上旬～中旬		58 + 9	牛 $\lambda$	〃, 〃, ( 〃 )
中 旬		150 + 22	獅子 $\gamma$	速、痕、(1866 I)
20 日～23 日		63 + 22	牛 $\kappa$	緩、輝、(エンケ)
16 日～十二月 8 日		155 + 39	大熊 $\mu$	速、痕、

上記の中、獅子  $\gamma$  群のものが最も著名のものであるが、昨年の觀測から見て

も、極大時の毎時間平均流星數も恐らく10個に滿たぬ程度のものであらう。今年は月の妨害が著しいので、觀測條件は頗る悪い。

一方、十一月のほとんど1月を通して見られる羊と牛より放射する流星群は、或はエンケ彗星に關聯するものがあり、一面恒星界に起原を有するものがあつて、問題を残してゐる流星群であるから、その觀測はおろそかに出来ない。出來得るならば、連續的に數夜に亘つての觀測がのぞましい。特に十一月はこれ等の流星群中に多くの火球を含むことが豫想されるので注意が肝要である。

×            ×            ×            ×            ×

前回報告後、本日までに到着した報告は下の通りである。 Observations, July and August, 1943, reported:

海老原 勇 夫 (東京)	七月
青 木 研 甫 (神戸)	八月
梶 村 晴 也 (大阪)	八月
湯 淺 一 經 (京都)	八月
鈴 木 久 彌 (大阪)	七月
川 人 武 正 (香川)	七月、八月
小 横 孝 二 郎 (和歌山)	七月、八月

以上の外、工藤晶三(東京)、猪俣康次(大阪)、西尾利夫(大阪)の三氏から火球の報告を得た。尙、東京方面の觀測は幹事齋藤馨兒氏の下で整理中である。

上記の觀測は水瓶 $\delta$ 群、ペルセウス群、駁者群を目的としたものが大部分であるが、詳細なる結果は報告が出揃つて後發表する。

×            ×            ×            ×            ×

さて、今回は、本年上半期(一月~六月)の綜合結果を發表する。觀測者12名、觀測回数21回、流星數 253 個といふ數字はあまり多いとは云へないが、四分儀群や五月の水瓶座の流星群の如きはよく觀測された方である。

**流星群の出現状況** Swarms observed during first half of 1943.

#### 4. 四分儀流星群 Quadrantids.

極大は例年の通り4日曉に起つた。一時間の平均流星數は吉井氏の結果からは30以上となつて居り、平井氏の觀測からも其の顯著振りが推察される。吉井氏が見られた同群の流星30個を光度別にすると、 Maximum was on January 4 according to Ys, who counts:

光 度 Mag.	-2	-1	0	1	2	3	4	5	6
數 No.	-1	1	0	2	6	2	11	6	1

となつて、平均光度 2.4 等、大光度のものも敢て多かつたとは云へないが、平



井氏の見られた流星がすべて1~2等以上であり、北村氏のものに、-4等のもの4個がある點（これには、光度の見積が稍大であつたかも知れないが）からも、本年は同群の眞の極大に逢着したものと云へる。即ち、三氏の觀測時に於ける地球の黃經は $102.5^{\circ}\sim 102.6^{\circ}$ に當り、神田清氏や Guth 氏の推定極大時とよく一致してゐる。（天界235號—昭和16年一月號—6頁參照） The display was really splendid, brighter members being frequent as seen by several persons.

□. 水瓶 $\eta$ 流星群  $\eta$  Aquarids.

この流星群は、肝腎の極大日たる五月3~5日が惡天候のため、極大決定の資料を得られなかつた。然し、7日朝に於ける小楨の一時間平均數7.5個（修正して10.7）から見て、本年の出現も決して少いものでなかつた事が想像される。この出現頻度は翌8日にも引つづき、一時間8.0（修正して11.4）を得てゐる點は注意すべきであらう。9日以後はずつと減少した模様である。 Days supposed maxima were cloudy; but Ko's observations on May 7 & 8 suggest splendid displays of the present epoch.

猶、小楨が水瓶群の前驅を見るため觀測したる四月30日早曉に於て、目的の水瓶群がなく、却て、鶯座 $\zeta$ 附近( $\alpha=287^{\circ}$ ,  $\delta=+15.5^{\circ}$ )に輻射點を有する5個の流星を觀測した。これは、五月3日朝の海老原氏の觀測中にも3個許り含まれてゐて、其の出現が確かめられた。2日朝の岡、松本兩氏の觀測中には4個の同一流星があつたが、これは基線の短い點から實徑路の算定は不可能である。これが爲には基線(兩觀測者の距離)が少くとも50軒以上を要することを述べて置きたい。 Ko observed  $\zeta$  Aquilids on April 30; EH, OK & MH also saw this group on May 2 & 3.

本期間中に得られた輻射點は後日掲載の豫定である。(1943-7-25)

觀測者及觀測地 (Observers and Localities)

觀 測 者 Observer	觀 測 地 Locality	經度(東) Longitude	緯度(北) Latitude
青 木 研 甫 (AO)	神戸市 Kobe	-135° 05'	+34° 37'
海老原 勇 夫 (EH)	東京市 Tokyo	-139 46	+35 43
平 井 利 朗 (HR)	岐阜縣 Gifu	-136 44	+35 25
井 上 修 (IO)	大阪市 Osaka	-135 30	+34 39
岩 田 二 郎 (IZ)	大阪市 Osaka	-135 31	+34 39
北 村 敏 資 (KM)	長崎縣諫早 Izahaya	-130 00	+32 50
小 楨 孝二郎 Ko	和歌山縣金屋 Kanaya	-135 15	+34 03
松 本 久 儀 (MH)	大阪市 Osaka	-135 32	+34 37
岡 泰 造 (OK)	大阪市 Osaka	-135 32	+34 37
吉 野 昭 三 (YN)	大阪市 Osaka	-135 32	+34 45
吉 井 耕 一 Ys	廣島縣竹原 Takehara	-132 54	+34 22
山 口 知 弘 (YG)	長野縣諫早市 Izahaya	-130 00	+32 50

## 観測された大流星 (Bright Meteors observed Jan.—June, 1943)

月日 Date	観測者 Obs	出現時刻 Appearance	確度 Weight	継続時間 Duration	光度 Magnitude	速度 Vel'ty	色 Co- lour	出現點 Appearance		消滅點 Disappearance		注意 Remarks
								R.A.	Decl.	R.A.	Decl.	
一月 Jan.												
4	(KM)	4 26.5	3	0 <sup>s</sup> .4	-4	VR	WY	145°	+57°	133°	+49°	Q
"	(KM)	5 16	3	0.8	-4	R	Y	135	+68	120	+63	Q
"	(KM)	5 21.5	4	1.0	-4	S	Y	235	+46	236	+44	Q
15	(SZ)	18 10		2~3 <sup>m</sup>	-2~2		RY	5	- 5?	5	- 5?	*
三月 Mar.												
25	(KM)	20 24	4	0 <sup>s</sup> .8	4~ 1.5×-4	S	BW	159	-12	152	-16	Tr.

備考 Remarks: Q=四分儀群 Quadrantid, Tr=痕 Trace, \*=光度5~6回変化.

以上の外, 植田耕作(大阪), 浅野孝之(姫路), 塚田三子(鹽釜)の三氏から火球を, 森涼氏(札幌)から停止流星の報告があつた. 尙五月11日の晝間の火球は既に報告済みであるので, 再録を省く.

## 観測の概略 (Daily Summary of Observations)

月日 Date	観測者 Obs.	開始 Begins	終了 Ends	時間数 Period	流星 向点 L	観測方向 Direction of watch	Meteors 記録 Rec'd	見タル Seen	F	備考 Remarks
1943年一月 January										
3-4	Ys	4 <sup>h</sup> 58 <sup>m</sup>	5 <sup>h</sup> 48 <sup>m</sup>	50 <sup>m</sup>	192.5°	NE	0	37	1.0?	Q26+4?
4-5	"	4 15	4 50	35	193.5	NE	0	8	1.0?	Q1?
3-4	(KM)	3 20	5 30	130	192.5	Dra	32	4	0.4	Q12+5?
2-3	(IO)	2 15	3 15	60	191.4	UMa	6	2	0.8	Q3?
4-5	"	1 30	3 30	90	193.4	UMa, Dra	14	5	0.7	(1)
4-5	(YN)	2 00	3 00	60	193.5	Dra	12	3	0.7	
4-5	(IZ)	2 50	4 50	120	193.5	Dra	8	4	0.6	Q1?
3-4	(HR)	4 30	5 00	30	192.5			7		Q6? (2)
4-5	"	4 30	5 00	30	193.6			0		(2)

## 三月 March

25-26	(KM)	19 50	21 45	95	272.9	Leo, UMa, Tau	25	0	0.65	20分休止
25-26	(YG)	19 50	20 50	60	272.9	Aur	9	0	0.6	

## 四月 April

29-30	Ko	2 57	4 12	75	307.7	Aql, Del	8	5	0.6	Z5
-------	----	------	------	----	-------	----------	---	---	-----	----